

心癒やす「スクールドッグ」 児童生徒の支えに

各地の学校で、児童生徒の相手を務める犬「スクールドッグ」の導入が広がっている。ストレスが軽減され、子どもたちが学校生活になじむきっかけを与える存在になっている。



アンと触れ合う児童たち（東洋英和女学院小学部で）

笑顔と前向きな気持ち

6月下旬、私立東洋英和女学院小学部（東京都港区）の小学部長室で、児童らがオーストラリアン・ラブラドゥードルの「アン」と遊んでいた。

アンは毎日、小学部長室で過ごし、休み時間になるとやってくる児童たちの相手をする。吉田太郎・小学部長（51）が授業を担当する時は一緒に教室に行き、児童をリラックスさせるのも仕事の一つだ。

4年生の女兒（9）は「友達とけんかをした日も、アンちゃんと遊ぶうちに気持ちが落ち着いて素直に『ごめん』と言える」と話す。



オーストラリアン・ラブラドゥードルは人懐っこく、毛が抜けにくいことからスクールドッグに適した犬種とされる

アンは2024年12月生まれの子犬だ。今年4月から、飼い主の吉田部長と一緒に「出勤」し始めると、児童たちに変化が表れた。学校に行きづらい時期のあった児童は、アンの世話や教室まで連れて歩くなどして触れ合うことで、学校に通えるようになった。アンに会うのが楽しみで、前向きな気持ちで登校できるようになった児童もいるという。

吉田部長は、別の私立小学校勤務時代から20年以上、スクールドッグを取り入れてきた。「一見、問題がなさそうでも、つらさや悩みを抱えている子どもは多い。アンを前にすると皆、笑顔が増えて互いにコミュニケーションを取りやすくなる」と強調している。

触れ合い、ストレス軽減

文部科学省によると23年度、不登校の小中学生は過去最多の34万人超で、11年連続で増えた。子どもたちが抱えるつらさへの対策が急務となっている。

犬と触れ合うことで、子どものストレスが軽減されたという調査結果もある。愛知淑徳大の高野恵代准教授らの研究チームは21年、不登校傾向のある生徒らが過ごす部屋に、スクールドッグを常駐させていた関西地方の私立中学校で調査を行った。

生徒28人を「犬と交流」、「犬の写真だけ見た」、「犬と交流せず、写真も見ない」の3グループにわけてストレスを計測。犬と交流した生徒たちと、犬の写真を見た生徒たちはストレスが軽減した。写真を見ただけの生徒も、犬と交流した経験を思い出したためとみられる。

人と動物の関係に詳しい西村亮平・東京大名誉教授はスクールドッグについて、「子どもは癒やしを得るだけでなく、犬と関係を築くために試行錯誤することで共感力や観察力といった『非認知能力』の向上にもつながる」と指摘する。

日本スクールドッグ協会（岡山県）によると、児童生徒の相手を務められる犬の養成や世話、抜け毛によるアレルギー対策など学校への導入にはハードルもある。同協会の青木潤一代表理事は「スクールドッグの活躍拡大には、安全面や衛生面を担保し、犬を管理できる人を増やすことも必要」と話している。